



| | |
|--------------|---|
| Title | 攻撃行動に影響を及ぼす状況要因と一般的信頼に関する検討 |
| Author(s) | 大和田, 智文; 石崎, 一記 |
| Citation | 対人社会心理学研究. 2006, 6, p. 15-22 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/7724 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

攻撃行動に影響を及ぼす状況要因と一般的信頼に関する検討^{1), 2)}

大和田智文（専修大学大学院文学研究科）

石崎一記（東京成徳大学人文学部）

本研究では、集団での攻撃行動の表出に影響を及ぼすと考えられる状況および個人の特性である一般的信頼に着目し、以下の2つの研究においてこれらの変数が攻撃行動の表出に及ぼす影響について検証した。その際、42名の男子大学生を実験参加者として用いた。研究1では、攻撃者の人数(個人か集団か)と一般的信頼が攻撃行動に及ぼす影響について実験的に検討を行った。研究2では、被攻撃者に関する属性(部外者か既知関係か)と一般的信頼が攻撃行動に及ぼす影響について、研究1と同様の方法で検討を行った。その結果、攻撃者が単独ではなく複数存在するときの方が攻撃行動は若干弱まることが示された。また、低信頼者は既知関係にある相手に対するよりも部外者に対して攻撃を高めることが示された。したがって、本研究を通して、部外者に対して不信感を抱きやすいと考えられる低信頼者が集団状況におかれた場合、高信頼者に比べて攻撃的になるのではないか、との予測が部分的に確認された。

キーワード：攻撃行動、競争的集団、部外者、既知関係、一般的信頼

問　題

近年、暴力的な犯罪が頻繁に発生しているが、中でも学級の内外におけるいじめ、集団暴行致死事件、親父狩りなど低年齢層の集団による仲間以外の第三者(すなわち部外者)に対する攻撃行動は顕著であり、これは我が国の社会的問題の一つともなっている。駅構内や電車内の少年らを中心とする見ず知らずの他者への徒党を組んでの暴行・傷害事件や、路上強盗等の増加傾向が著しいといわれているのは周知の通りである。このような集団状況が見ず知らずの他者に対する攻撃行動を促進させるのならば、それにはいかなる理由が考えられるであろうか。

先般、集団状況における攻撃行動の促進に関する検討を行った研究には、Diener(1976)やJaffe & Yinon(1979)、Zimbardo(1970)などによる実証的研究がみられる。こうした実証的研究においては、集団状況が攻撃行動の表出に対して促進的な機能を果たすという結果が必ずしも一貫して確認されてはいない。しかし、そこでは集団状況における攻撃行動の生じやすさとして、集団による匿名性や責任の分散、個人の没個性化による個人的責任の生じにくさなどが指摘されている。たとえば、Zimbardo(1970)が行った一連の実験のいくつかでは最小集団状況に近い集団であっても、一定の集団化手続きをとることによって生じた没個性化が相手との間の個人間葛藤を引き起こし、それが攻撃行動の表出に対し促進的に機能したのではないかと考えられている。

このような没個性化とそれに伴う個人間葛藤といった個人間過程への言及に加え、冒頭に示した理由を検討する上では、Miller & Bugelski(1948)やOpotow(1990)、さらには多くの臨床的研究(e.g.,桑原,1999)などによって

議論されている集団内あるいは他集団(すなわち、当該集団メンバーから見た部外者)との集団間における過程を考えていく必要もある。上記によると、メンバー間に相互依存性が存在しかつ他集団ないし部外者とは競争的関係にある集団(以下、“競争的集団”と記載)状況は、部外者に対する非友好的感情を高めたり(Miller & Bugelski,1948)、道徳的排除を引き起こしやすいが(Opotow,1990)、その一方で、相互依存性がメンバー間の連携を高めたり集団内の緊張関係を軽減したりするよう働くため、このような競争的集団状況はそこにおける部外者を共通の敵、さらに言えば犯罪の被害者として選択させやすくしている(桑原,1999)ことが指摘されている。

このように、集団状況における攻撃行動の促進に関しては、従来より個人間過程、集団内・集団間過程のそれぞれにおいてさまざまな議論がなされてはいるが、既述のように真に集団状況が攻撃行動を促進するものと考えられるならば、今後はこれらの過程に加えて個人内過程をも含みうる積極的な議論を行うことにより、はたして集団状況が攻撃行動を促進するものであるのか否か、またそのような集団状況とはいかなるものであるのかを明らかにしていく必要がある。

そうした中、清成・山岸(1996)や山岸・渡部・林・高橋・山岸(1996)、山岸・山岸・高橋・林・渡部(1995)は、一般的信頼とコミットメント(集団の一特性)の形成、および部外者に対する信頼に関する研究において、集団内・集団間過程、個人内過程のいずれも含みうる議論を展開しており、これら一連の研究結果は、他集団ないし部外者に対する攻撃行動の促進についての理解を得る上で、貴重な視座を提供するものであるといえる。それによると、“相手が自分に友好的に振る舞ってくれるだろうと考える客

観的な根拠がないにも関わらず、相手の人間性についての肯定的な信念のゆえに抱く”信頼感(菊地・渡邊・山岸,1997,p.24)である“一般的信頼”的低い者(低信頼者)は、ある行為者が現在のパートナーとの関係以外の関係からより大きな利益を得られるにもかかわらず、現在のパートナーとの関係にとどまろうとする“コミットメント関係”を形成しやすく(山岸他,1995,1996)、またコミットメント関係を形成している程度の強い者ほど部外者に対する不信が強くなる(清成・山岸,1996)ことが指摘されている。さらに Berkowitz & Heimer(1989)によると、相手に対する不信の念などの不快な感情を抱くことが、攻撃の表出を抑制する閾値を高めることに貢献するとされている。これらの指摘は、集団状況における攻撃行動を検討するに際し、個人間・集団内・集団間過程に加え個人内過程をも考慮するにあたって見逃すことはできないものである。

以上、集団状況が攻撃行動を促進するであろうと考えられる根拠を、個人間・集団内・集団間および個人内のそれぞれの過程ごとに概観した。ここで上記のそれぞれの過程に有機的関連性を見出そうとすれば、以下のような予測を導くことが可能となるであろう。すなわち、もともと部外者に対して不信感を抱きやすいと考えられる低信頼者にあって、彼らが集団状況(特に Miller & Bugelski(1948)で示されたような競争的集団状況)におかれた場合、そこでの部外者に対する行動は、もともと不信の閾値が低い高信頼者³⁾に比べて攻撃的になるのではないか、と考えられる。

そこで本研究では、攻撃行動の表出に影響を及ぼすと考えられる上に示した諸状況および個人の特性である一般的信頼に着目し、以下の2つの研究においてこれら諸変数の影響過程について検証することにより、集団での攻撃行動という現象を理解していく上に必要な基礎資料を得ることを目的とする。

研究 1

目的

先般、集団状況が攻撃行動を促進するといわれているが、果たして実際にはどうなのだろうか。また、“集団”は一般的信頼の高低によってどのような意味を持ち、その意味の違いによって攻撃行動の表出に差異は生じるのだろうか。これらの疑問を確認するため、研究1では上記の予測より導かれた下記の仮説に関する検討を行うこととする。

仮説 1-1 競争的集団状況は、同様の個人状況よりも攻撃行動を促進するだろう(集団間過程と個人間過程を比較検討)。

仮説 1-2 低信頼者は高信頼者よりも、相手(部外者)に対して攻撃的に行動するだろう(個人内過程および個人

間過程を検討)。

方法

実験計画 攻撃時の状況(個人・相手部外者(以下研究1においては、“個人”と記載)、競争的集団・相手部外者(以下、“集団”と記載)の2水準)、一般的信頼(高群、低群の2水準)を要因とする2要因被験者間計画を用いた。

一般的信頼の測定 渡部・林・神・高橋・山岸(1993)などで開発された11項目からなる信頼尺度の最新版への記入を求めた。各項目は、“1”(全くそう思わない)から“7”(強くそう思う)までの7段階で評定するものであった。この信頼尺度は、一般的信頼下位尺度と用心深さ下位尺度より構成されるが、本研究では、菊地他(1997)などと同様に、“ほとんどの人は基本的に正直である”、“私は人を信頼するほうである”、“ほとんどの人は基本的に善良で親切である”、“ほとんどの人は他人を信頼している”、“ほとんどの人は信用できる”、の5項目からなる一般的信頼下位尺度のみを分析に用いた。

実験参加者 東京成徳大学男子学生22名を対象とした⁴⁾。平均年齢は、19.7歳($SD = 1.29$ 歳)であった。実験参加者(以下、参加者と記載)の一般的信頼得点の中央値は20および21(範囲10から25まで、72.7%)であったため、同得点が20点以下の参加者を低信頼者(11名)、21点以上の参加者を高信頼者(11名)とし、攻撃時の状況×一般的信頼の4条件の各セルのうち、個人条件の2つのセルに5名ずつ、集団条件の2つのセルに6名ずつ配置した。本実験では、各セルが5名から6名と少数ではあったが、冒頭でも述べた通り本研究で扱う現象は社会的に広く生じると考えられることから、各セルが少数ではあっても上記の2要因被験者間計画を用いた統計的検討を行うにあたっての妥当性は保たれているものと考えられた。また本実験では、男子の方がより攻撃的に行動しやすいとする湯川・吉田(1999)などに基づき、参加者を男子のみとした。

個人条件の手続き 大渕(1993)によると、攻撃行動とは他者に危害を加えようとする意図的行動であるとされる。これに従うと、たとえば不快なブザー音を他者に意図的に聞かせる行為は、不快刺激という一種の危害を他者に意図的に加える行為と考えられるため、本研究では、以下に示す反応時間課題の中で参加者が対戦相手に意図して与えるために設定したブザー音強度を攻撃行動の指標として用いた。なお、このブザー音の第7段階は第1段階よりも有意に不快であることが予備実験により確認されていた(両側検定; $t(8) = 6.00, p < .01$)⁵⁾。

“その日の気分が反応時間に及ぼす影響に関する研究”という名目で、参加者は1名ずつ実験に参加した。

参加者は、攻撃行動を測定するための“反応時間課題(reaction time task)”をパソコン上で行った。表向き対

Table 1 攻撃時の状況および一般的信頼ごとのブザー音強度の平均値(低信頼者(SD)/高信頼者(SD))

| 指標\状況 | 個人 | 集団 |
|-----------------|------------------------|-----------------------|
| ブザー音強度(第1セッション) | 33.4(10.59)/26.4(4.08) | 27.0(6.79)/30.8(3.27) |
| ブザー音強度(第2セッション) | 32.2(7.08)/34.8(6.71) | 29.8(5.57)/35.8(2.78) |
| ブザー音強度(第3セッション) | 43.4(6.53)/39.2(4.45) | 34.2(1.89)/36.2(0.47) |

戦相手と反応の速さを競う反応時間課題は、従来より攻撃行動を測定する方法として一般的に用いられてきている(e.g., Bushman, 1995, 2002; Bushman & Baumeister, 1998; 大渕, 1979; Ohbuchi, 1982; Taylor, 1967; 湯川・吉田, 1998, 1999, 2000)。参加者は、実験者(筆者)より、“今からパソコンを用いて、別の場所にいる相手と反応時間を競う課題をやってもらう。対戦相手は男子大学生だが、対戦相手が誰であるかはお互いに全く知らされておらず、実験終了後もそれを明らかにされることはない”と説明をうけた。ただし、この対戦相手は実際には存在しなかった。

参加者はヘッドフォン(トライコーポレーション・マルチメディアヘッドホンIMA-07シリーズ)を装着し、以下の手順で別の場所にいる相手と反応時間を競った。その際、(a)各試行に先立ち、参加者と対戦相手は次の試行で相手に与えるブザー音強度を7段階の中から設定し合う、(b)画面に“GO”と表示されたら、できるだけ速くマウスをダブルクリックする、(c)ダブルクリックの速さで相手に勝った場合相手にブザー音を与え、負けた場合相手からブザー音をもらう、という手順で8試行からなるセッションを3回(合計24試行)行った。対戦相手のブザー音強度は、第1セッションにおいては“1”から“3”(低い挑発)、第2セッションにおいては“3”から“5”(中程度の挑発)、第3セッションにおいては“5”から“7”(高い挑発)が無作為な順序で設定されるように⁶、また、勝敗は各セッションごとに無作為な順序で4勝4敗になるように予めプログラムされていた。

反応時間課題終了後デブリフィングを行い、実験は終了した。

集団条件の手続き “その日の気分が反応時間に及ぼす影響に関する研究”という名目で、参加者は2名ずつ、参加者を装った同性のサクラ1名とともに実験に参加した。以下には、個人条件とは異なる点を主に記載する。

参加者とサクラは、実験室に入るとまもなく、本実験とは直接関係のない話題に関するディスカッションを約8分間行った。このディスカッションは、参加者相互に面識をもたせることを主な目的としていた。

続いて、本実験として、攻撃行動を測定するための“反応時間課題”をパソコン上で行った⁷。参加者は実験者(筆者)より、個人条件のときと同様の説明をうけた。反応

時間課題では、サクラ、参加者1、参加者2の順番に1人ずつ対戦相手と反応時間を競った。集団条件においても対戦相手は1人であった。サクラには、第1セッションにおいては“1”から“3”(低い挑発)、第2セッションにおいては“3”から“5”(中程度の挑発)、第3セッションにおいては“5”から“7”(高い挑発)を設定するように、実験者より予め指示がなされていた⁸。

本手続きでは、上記のディスカッションと相手への共同対戦状況を導入することにより、“競争的集団”的操作を行った。

反応時間課題終了後デブリフィングを行い、実験は終了した。

従属変数 攻撃行動(ブザー音強度):反応時間課題で設定したブザー音強度(設定強度の1から7まで)の8試行の合計値をセッションごとに算出した。測定値の単位は、ブザー音強度設定レベル(“1”から“7”まで)を基準とした。

実施時期 2003年6月上旬から10月上旬であった。

結果

セッションごとのブザー音設定強度の平均値および標準偏差をTable 1に示した。

ブザー音の強度について、状況×一般的信頼×時系列(セッション、3水準)を要因とする3要因混合計画(第1、第2要因は被験者間配置、第3要因は被験者内配置)の分散分析を行った。結果は、時系列の主効果のみが有意であった($F(2,24) = 10.82, p < .01$)。多重比較(LSD法)の結果、第1、第2セッションよりも第3セッションの方が設定したブザー音強度は有意に高かった($MSe = 27.18, ps < .05$)。そこで、最も攻撃が高まった第3セッションにおけるブザー音強度について、状況×一般的信頼を要因とする2要因分散分析を行った。結果は、状況の主効果が有意であった($F(1,12) = 5.24, p < .05$)。

すなわち、対戦相手の設定するブザー音の強度(挑発の程度)に応じて設定強度が上昇し、最も設定強度が高まった第3セッションにおいては、個人条件でその設定強度が有意に高かった。したがって、仮説はいずれも支持されなかった。

考察

研究1において、部外者に対して攻撃が行われる場合、

競争的集団状況が攻撃行動の表出に対し促進的に働くことは確認されなかった。また、一般的信頼が攻撃行動の表出に及ぼす影響や、一般的信頼の高低による“集団”的意味の違いも見出されなかった。

競争的集団状況において攻撃行動に若干抑制が働いた原因として、以下のようなことが考えられた。たとえばZimbardo(1970)が行った実験における参加者の有する匿名性は、被攻撃者に対してのみならず参加者相互においても強く保たれていたものと考えられるが、一方、研究1で行った実験における参加者の有する匿名性は、被攻撃者に対してのみ保たれていたため、このような参加者相互の匿名性の低さが攻撃行動の抑制を促す一因となつたのではないだろうか。この点において、研究1における集団状況は、相手との競争的側面よりもメンバー間の相互依存ないしは連携における匿名性の低さが強調されたものであったのではないかと考えられた。したがって、今後は実験操作の妥当性に関する再検討を行うなど、さらに実験の精度を上げていくことが必要とされる。

しかしながら、集団で相手(部外者)に対して暴力を振るうという現実的な場面において、既知の関係にあるとみられる集団成員相互に匿名性が保たれている状況は実際ありえないことであるため、こうした匿名性の有無や強弱といった視点からの攻撃行動の表出量に関する説明には自ずと限界もみられる。そうした中で、集団状況が部外者への攻撃行動表出に対して促進的に機能しているという臨床的知見(e.g.,桑原,1999)は、新たな視点をもたらす可能性があろう。

すなわち、この一見矛盾を呈する、研究1における結果と上記の臨床的知見とは、たとえ競争的な集団であっても、その中に攻撃行動表出に際して果たす抑制的役割と促進的役割という両機能内在の可能性を示唆するものなのではないかと思われた。したがって、競争的集団状況におけるこれら両機能の役割に関しては検討していくことが今後に望まれる。

研究2

目的

研究1においては、既述の通り予測と反した結果が示された。しかしながら、研究1において想定された対戦相手とは“部外者”のみであった。それゆえ、もともと部外者に対して不信感を抱きやすいと考えられる低信頼者にとって、彼らが特に競争的集団状況におかれた場合、そこでの部外者に対する行動は、もともと不信の閾値が低い高信頼者に比べて攻撃的になるのではないか、という当初の予測を確認するためには、“部外者”でない相手(すなわち、“既知関係”にある相手と考えられる)に対してはたしてどのように行動するのか、という点についてここで

改めて検討を加えておく必要がある。

そこで上記の予測を確認するため、研究2では下記の仮説に関する検討を行うこととする。

仮説2 少なくとも低信頼者は、既知の相手よりも部外者に対して攻撃的に行動するだろう(集団間過程と集団内過程を比較)。

対戦相手が既知関係にある相手である場合、そこでみられる攻撃のやりとりを伴った二者間の相互作用過程は同じ集団に属する人物間の葛藤事態であると考えられるため、これを集団内葛藤事態であると想定できる。一方、対戦相手が部外者である場合、これを集団内葛藤事態との対比でみると、参加者・相手間の相互作用過程はいわばある集団の1メンバー(すなわち参加者)と他集団の人物(すなわち部外者)という形での集団間葛藤事態であると想定することもできよう。そこで研究2においては、集団内葛藤事態とのより分かりやすい対応関係に配慮し、対戦相手が部外者である場合を集団間葛藤事態であると想定した。

方法

実験計画 攻撃時の状況(個人・相手部外者)(以下研究2においては、“部外者”と記載)、個人・相手既知関係(以下、“既知関係”と記載)の2水準、一般的信頼(高群、低群)の2水準を要因とする2要因被験者間計画を用いた。

一般的信頼の測定 一般的信頼の測定方法は、研究1の場合と同様であった。

実験参加者 東京成徳大学男子学生および専修大学男子学生、計20名を対象とした。平均年齢は、20.0歳($SD = 1.14$ 歳)であった。参加者の一般的信頼得点の中央値は19および22(範囲13から25まで、70.0%)であったため、研究1と同様に同得点が20点以下の参加者を低信頼者(10名)、21点以上の参加者を高信頼者(10名)とし、攻撃時の状況×一般的信頼の4条件の各セルに5名ずつ配置した。本実験においても各セルは5名と少數であったが、研究1と同様の理由により、上記の2要因被験者間計画を用いた統計的検討を行うにあたっての妥当性は保たれているものと考えられた。また、本実験においても参加者は男子のみとした。

部外者条件の手続き 本条件の操作手続きは、研究1における個人条件の操作手続きと全く同様であり、当該条件で得られたデータを本条件においてそのまま使用することとした。

既知関係条件の手続き 既述の通り研究2の目的は、相手が部外者ではない者である場合、それが部外者である場合と比べて攻撃行動にどのような変化がみられるかを確認することである。清成・山岸(1996)によると、部外者とは“コミットメント関係を形成している特定の相手以外の相手”(p.59)であるとされるが、ここで“部外者”では

Table 2 被攻撃者に関する属性および一般的信頼ごとのブザー音強度の平均値(低信頼者(SD)/高信頼者(SD))

| 指標＼属性 | 部外者 | 既知関係 |
|-----------------|------------------------|------------------------|
| ブザー音強度(第1セッション) | 33.4(10.59)/26.4(4.08) | 24.8(7.78)/33.8(13.73) |
| ブザー音強度(第2セッション) | 32.2(7.08)/34.8(6.71) | 22.6(6.25)/37.6(16.43) |
| ブザー音強度(第3セッション) | 43.4(6.53)/39.2(4.45) | 24.2(8.63)/41.4(8.82) |

ない相手”を実験的に操作する際、清成・山岸(1996)に従えば、相手に対する関係の継続性であるコミットメント関係が相手との間に成立している関係を想定すればよいことになる。山岸他(1995)によると、コミットメントとは相手に対する感情的な関与ではなく、上記のごとく関係の継続性であるとしている。これに従うと、たとえばある人物A(以下の実験においては実験責任者)が実験開始の時点での別の人B(以下の実験においては参加者)に挨拶をし、後にAとBがともにある課題を行い、さらに実験終了後AとBが会合という状況は、この二者間に関係の継続性が存在している状況であると考えられる。したがって、以下の手続きにおいてはこのような状況を設定することで既知関係の操作を行った。

“その日の気分が反応時間に及ぼす影響に関する研究”という名目で、参加者は1名ずつ実験に参加した。

最初に参加者は、実験者より概ね次のような説明をうけた。“今日の実験は、実験者(筆者)が現在他大学生と共にで行っている研究の一環として行うものである。今日の実験では、パソコンを用いて反応時間を競う課題を行うが、その対戦相手をつとめるのがこの共同研究の中心的 Personen であり、その人物が今日の実験の責任者である。実験責任者は、大学内の別室にまもなく到着する予定であるが、用事があつて今日の実験開始には間に合わないため、予め録音しておいたメッセージをあなた(参加者)に聞かせてほしいと頼まれている。実験責任者は、実験が終了した時点でこの実験室に挨拶に来る予定になつてゐるため、そのときにあなた(参加者)を紹介する”。ただし、この実験責任者は実際に存在しなかつた。説明の後、実験者は参加者に対し、ボイスレコーダーに予め録音された実験責任者の自己紹介のことばを聞かせた。

続いて、攻撃行動を測定するための“反応時間課題”をパソコン上で行った。攻撃行動の指標は、研究1と同様に参加者の設定したブザー音強度とした。

反応時間課題終了後デブリフィングを行い、実験は終了した。

従属変数 研究1と同様、攻撃行動(ブザー音強度)であった。

実施時期 2003年6月上旬から10月上旬であった。

結果

セッションごとのブザー音設定強度の平均値および標準偏差をTable 2に示した。

ブザー音の強度について状況×一般的信頼×時系列を要因とする3要因混合計画(第1、第2要因は被験者間配置、第3要因は被験者内配置)の分散分析を行つた。その結果、状況×一般的信頼、一般的信頼×時系列、状況×時系列の交互作用に有意な傾向がみられた($F(1,16) = 4.18, p < .10$; $F(2,32) = 2.51, p < .10$; $F(2,32) = 2.50, p < .10$)。下位検定の結果は以下の通りであった。一般的信頼について、状況の単純主効果が有意または有意傾向を示し(低信頼者, $F(1,16) = 36.37, p < .01$; 高信頼者, $F(1,16) = 4.00, p < .10$)、既知関係条件において一般的信頼の単純主効果がみられた($F(1,16) = 44.14, p < .01$)。また、第2セッションと第3セッションにおいて一般的信頼の単純主効果が有意な傾向を示し(第2セッション, $F(1,16) = 3.07, p < .10$; 第3セッション, $F(1,16) = 3.15, p < .10$)、一般的信頼については、時系列の単純主効果が有意であった(低信頼者, $F(2,32) = 3.43, p < .05$; 高信頼者, $F(2,32) = 8.22, p < .01$)。多重比較(LSD法)の結果、設定したブザー音強度は、低信頼者条件において第2セッションよりも第3セッションの方が有意に高く、高信頼者条件において第1セッションよりも第2、第3セッションの方が有意に高かった($MSe = 31.30, ps < .05$)。第3セッションにおいては、状況の単純主効果が有意で($F(1,16) = 5.38, p < .05$)、部外者条件においては時系列の単純主効果が有意であった($F(2,32) = 10.60, p < .01$)。多重比較(LSD法)の結果、設定したブザー音強度は、部外者条件において第1、第2セッションよりも第3セッションで有意に高かった($MSe = 31.30, ps < .05$)。

すなわち、部外者に対する攻撃レベルは、第1、第2セッションよりも第3セッションで有意に高く、第3セッションにおいては、既知関係にある相手への攻撃レベルと比べて有意に高かった。低信頼者の場合、部外者に対する攻撃レベルは、既知関係にある相手に対する場合と比べて有意に高かった。逆に高信頼者は、既知関係にある相手に対して部外者のときよりも攻撃レベルを高める傾向にあった。また、低信頼者は高信頼者と比べて、既知関係にある相手に対して攻撃レベルを有意に抑えていた。

さらに、有意差には至らなかったものの、低信頼者の部外者に対する攻撃レベルは高信頼者に比べて高かった。したがって、仮説2は支持された。

考 察

研究2において、低信頼者の部外者に対する攻撃行動は、既知関係にある相手に対する場合と比べて高くなり、さらに、有意差には至らなかったものの、低信頼者は高信頼者よりも部外者に対する攻撃行動が高かったことが示された。また、低信頼者は既知関係にある相手に対する攻撃行動を高信頼者よりも抑えていたことも示された。

Miller & Bugelski(1948)や Opotow(1990)などが指摘しているように、部外者はある集団のメンバーからみると非友好的な存在となりやすく、加えて、特に他者一般を信頼する傾向の弱い低信頼者にあっては部外者を容易に信頼することは困難となる可能性が示唆されていた(清成・山岸,1996)。また研究2においては、既述の通り、対戦相手が部外者である場合は集団間葛藤事態、対戦相手が既知関係にある場合は集団内葛藤事態であると想定した。このことから研究2における結果は、低信頼者がこれらの葛藤事態にさらされた場合、元来部外者に対し強い不信を抱きやすいと考えられる低信頼者は、集団内葛藤の相手である既知関係の者ではなく集団間葛藤の相手である部外者に対し不信を抱きやすく、その不信感といういわば不快な感情が攻撃行動の促進要因として機能した(Berkowitz & Heimer,1989)ことにより、集団間葛藤の相手である部外者に対し攻撃を高めたものではないかと考えられる。

以上より、集団間葛藤事態において低信頼者は、高信頼者と比べ相手に対する攻撃を高めることが示された。

また、高信頼者における既知関係にある相手に対する攻撃行動は、部外者に対する場合と比べ高い傾向にあることが示された。このことは、予測していなかった結果であった。ここで既知関係という状況が高信頼者に攻撃行動を促進させた原因として、以下のようなことが推測された。すなわち、高信頼者は、“他者の信頼性”的欠如を示唆する情報に対して低信頼者よりも敏感な人々である(小杉・山岸,1998)ため、実験の中で既知関係として位置づけられた対戦相手、すなわち実験の責任者たるべき人物が、実験室に参加者を待たせておいて本人は遅れてやってくる、という事実が高信頼者にとってはそもそも相手の信頼性の欠如を示唆する情報として働いていたのではないかと思われる。そして、その“相手の信頼性”的欠如を示唆する情報に接したことにより、高信頼者は相手に対する不信を強め、低信頼者の場合と同様にその不信感情が攻撃行動の促進要因として働き、既知関係にある相手に対する攻撃を高めたのではないかと考えられ

る。

以上より、高信頼者は相手が部外者であるか否かにかかわらず、相手が攻撃を受けてもやむを得ないような人物であると合理的に判断できるような場合は、攻撃を高める可能性もあることが示された。

なお、研究2において用いた集団内葛藤事態の操作において、集団内のメンバーが実験参加者と共同研究の責任者という異なった立場の人物であったことから、厳密な集団内操作が行われていたか否かに関し若干の疑問が残った。この点に関しては、実験操作のよりいっそうの精緻化が望まれるところでもある。

総 合 考 察

本研究では、上記の2つの研究において、攻撃行動に影響を及ぼす状況要因と一般的信頼に関する検討を行ってきた。

研究1において、部外者に対して攻撃が行われる場合、競争的集団状況が攻撃行動の表出に対し促進的に働くことは確認されず、また、一般的信頼が攻撃行動の表出に及ぼす影響や、一般的信頼の高低による“集団”的意味の違いも見出されなかつた。加えて、研究1における集団状況は、相手との競争的側面よりもメンバー間の相互依存における匿名性の低さが強調されたものであったのではないかと考えられた。その一方で、競争的集団状況が攻撃行動表出に際して果たす抑制的役割ないし促進的役割という両機能の存在が、ここにおいて改めて示唆された。

研究2において、低信頼者は集団間葛藤の相手(すなわち部外者)に対し、高信頼者よりも攻撃を高めることが示された。一方、高信頼者は相手がどのような人物であろうが、相手が攻撃を受けてもやむを得ないような人物であると合理的に判断できるような場合は、攻撃を高める可能性もあることが示された。また、他者の信頼性の欠如を示唆する情報に対して敏感な高信頼者においては、攻撃をしかけてくる相手に対する不信がもたらした不快な感情が攻撃行動の促進要因として機能している可能性が考えられた。さらに考察を加えると、相手の攻撃を不当であると感じた場合、自分が報復していることを相手が知っているときの方がより攻撃的になる(Worchel, Arnold, & Harrison, 1978)ことから、相手からの攻撃を不当であると敏感に受け取った高信頼者は、対戦相手からの不当な攻撃に対する報復を相手に知らしめるために顕名での攻撃、すなわち既知関係にある相手への攻撃の表出を好んだのではないかとも考えられよう。

本研究では、集団状況における攻撃行動の促進を検討するにあたり、もともと部外者に対して不信感を抱きやすいと考えられる低信頼者にあって、彼らが競争的集団

状況におかれた場合、そこでの部外者に対する行動は、もともと不信の閾値が低い高信頼者に比べて攻撃的になるのではないか、との予測を立て、攻撃者と被攻撃者に関する個人内・個人間・集団内および集団間過程の有機的関連性を念頭においていた仮説を検証した。その結果、競争的集団状況における攻撃行動に、一般的信頼の高低による違いは見出されなかつたが、そうした中にはあっても、低信頼者は既知関係にある相手よりも部外者に対して攻撃を高めるという、当初の予測は確認された。したがって本研究は、冒頭に示したような集団暴行致死事件や親父狩りといった社会的現象を理解する上で貴重な視座を提供するものであったといえよう。しかしながら、人々に備わる潜在的な攻撃性が、はたしてどのような社会的・対人的文脈にあっていかなる心理過程を経て顕現的な行動となりえるのかといった点に関しては、明確になっていない。よって、今後はこうしたさまざまな文脈や心理過程と攻撃行動との関連性についてさらなる検討を加えていくことが望まれよう。

引用文献

- Berkowitz, L., & Heimer, K. 1989 On the construction of the anger experience: Aversive events and negative priming in the formation of feelings. In L.Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.22. Orland (pp.1-37). FL: Academic Press.
- Bushman, B.J. 1995 Moderating role of trait aggressiveness in the effects of violent media on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 950-960.
- Bushman, B.J. 2002 Does venting anger feed or extinguish the Flame? Catharsis, rumination, distraction, anger, and aggressive responding. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 724-731.
- Bushman, B.J., & Baumeister, R.F. 1998 Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.
- Diener, E. 1976 Effects of prior destructive behavior, anonymity, and group presence on deindividuation and aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 497-507.
- Jaffe, Y., & Yinon, Y. 1979 Retaliatory aggression in individuals and groups. *European Journal of Social Psychology*, 9, 177-186.
- 菊地雅子・渡邊席子・山岸俊男 1997 他者の信頼性判断の正確さと一般的の信頼—実験研究 実験社会心理学研究, 37, 23-36.
- 清成透子・山岸俊男 1996 コミットメント形成による部外者に対する信頼の低下 実験社会心理学研究, 36, 56-67.
- 小杉素子・山岸俊男 1998 一般的信頼と信頼性判断 心理学研究, 69, 349-357.
- 桑原尚佐 1999 暴力非行—失われた他者感覚 清永 賢二(編) 少年非行の世界(pp.67-100) 有斐閣選書
- Miller, N.E., & Bugelski, R. 1948 Minor studies of aggression: 2. The influence of frustrations imposed by the in-group on attitudes expressed toward out-groups. *The Journal of Psychology*, 25, 437-442.
- 大渕憲一 1979 友好刺激に対する無反応としての Hostility 心理学研究, 50, 249-255.
- Ohbuch, K. 1982 Negativity bias: Its effects in attribution, hostility, and attack-instigated aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 49-53.
- 大渕憲一 1993 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学 — サイエンス社
- Opotow, S. 1990 Moral exclusion and injustice: An introduction. *Journal of Social Issues*, 46, 1-20.
- Taylor, S.P. 1967 Aggressive behavior and physiological arousal as a function of provocation and the tendency to inhibit aggression. *Journal of Personality*, 35, 297-310.
- 渡部 幹・林 直保子・神 信人・高橋伸幸・山岸俊男・山岸 みどり 1993 個別の信頼と一般的の信頼 一質問紙調査 日本グループ・ダイナミックス学会第 41 回大会発表論文集, 126-127.
- Worchel, S., Arnold, S.E., & Harrison, W. 1978 Aggression and power restoration: The effects of identifiability and timing on aggressive behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 43-52.
- 山岸俊男・渡部 幹・林 直保子・高橋伸幸・山岸みどり 1996 社会的不確実性のもとでの信頼とコミットメント 社会心理学研究, 11, 206-216.
- 山岸俊男・山岸みどり・高橋伸幸・林 直保子・渡部 幹 1995 信頼とコミットメント形成—実験研究— 実験社会心理学研究, 35, 23-34.
- 湯川進太郎・吉田富二雄 1998 暴力映像と攻撃行動: 他者存在の効果 社会心理学研究, 13, 159-169.
- 湯川進太郎・吉田富二雄 1999 暴力映像が攻撃行動に及ぼす影響—攻撃行動は攻撃的な認知および情動によって媒介されるのか?— 心理学研究, 70, 94-103.
- 湯川進太郎・吉田富二雄 2000 暴力映像と攻撃行動: 怒り喚起の効果 筑波大学心理学研究, 22, 139-149.
- Zimbardo, P.G. 1970 The human choice: Individuation, reason, and order versus deindividuation, impulse, and chaos. In W.J. Arnold & D. Levine (Eds.), *Nebraska Symposium on Motivation*, 1969 (pp.237-307). Lincoln: University of Nebraska Press.

註

- 1) 本研究は、第1著者が東京成徳大学大学院心理学研究科 2003 年度修士論文として提出したものに一部加筆・修正を行ったものである。なお本研究の一部は、日本発達心理学会第15回大会および日本心理学会第68回大会で発表された。

- 2) 本研究の実験実施にあたり、湯川進太郎講師(現筑波大学)には貴重な御示唆をいただきました。深く感謝申し上げます。また本稿執筆にあたり、専修大学の下斗米淳教授より御指導を賜りましたことを、ここに記して深く感謝申し上げます。
- 3) 高信頼者とは、菊地・渡邊・山岸(1997)によると、“相手が自分に友好的に振る舞ってくれるだろうと考える客観的な根拠がないにも関わらず、相手の人間性についての肯定的な信念のゆえに抱く”信頼感(p.24)である“一般的な信頼”を高く維持している者のことである。菊地他(1997)などでは一般的な信頼を高く維持している者について、“低信頼者”に対応する用語である“高信頼者”を一般的に用いて説明している。
- 4) 本研究の実験参加者数は、実験上の種々の制限より、研究1および研究2を通して延べ42名と少数であったが、今後さらに参加者数を増やして同様の検討を行うことにより、結果の信頼性をより高めていくことが可能であると考える。
- 5) この予備実験では、不快刺激として第1段階と第7段階のブザー音を用いた。これは、ブザー音強度(音量)を最小値から最大値へ上げることによって参加者の不快感がどの程度変化するかを確認するために行った。参加者に対しては刺激提示に先立ち、画面に表示されるブザー音強度の数字が大きくなるほどブザー音も大きくなるとの説明がなされていた。そのため、参加者の不快感の変化は、単にどれだけの強度の音を聞かされるかにとどまらず、このブザー音強度を示す数字の変化(1から7へ変化)によっても影響されていました。
- 6) 反応時間課題における参加者と対戦相手との相互作用が、参加者にとっては明らかに攻撃事態であると理解される必要があった。そのため参加者に対して、対戦相手のブザー音強度設定の時系列的な上昇による挑発を行い、攻撃事態を導入した。またその効果を確認するための手続きとして、時系列を被験者内要因とした。
- 7) 本研究で用いた反応時間課題では、1人の参加者(あるいはサクラ)から見た集団内の他の2人の人物が、対戦相手のどのブザー音強度に対峙しているかがシステム上判断できないため、“サクラー参加者1—参加者2”を1タームと考え、この1タームに対する対戦相手のブザー音強度の設定は全て同一になるように予めプログラムするようにした。これに対して、対戦相手は一旦ブザー音強度を設定すると、サクラ、参加者1、参加者2の3人と競い終わるまでは強度の設定を変更できない仕組みになっている、との説明が参加者に対してなされた。
- 8) 集団での攻撃行動には、積極的役割を担う人物と消極的な役割しか持たない人物がいることが示されている(桑原,1999)ため、本実験におけるサクラを積極的役割を担う人物として扱った。

The examination of effects of situational factors and general trust on aggressive behavior

Tomofumi OWADA (*Graduate School of Literature, Senshu University*)

Kazuki ISHIZAKI (*Faculty of Humanities, Tokyo Seitoku University*)

Two studies were conducted to test how the effects of the following situational factors and general trust influenced aggressive behavior. Forty-two male undergraduates participated in the following 2 studies. In study 1, the effects of the number of aggressor (i.e. individuals vs. groups) and aggressor's general trust on aggressive behavior were investigated in a laboratory setting. In study 2, the effects of categories about the victims (i.e. outsiders vs. acquaintances) and the aggressor's general trust on aggressive behavior were investigated in the same method as study 1. The results showed that members with both high and low levels of general trust, when they were in groups, refrained more from exerting aggression toward the opponent, furthermore, members with low level of general trust exerted more aggression toward the opponent as outsiders than that of acquaintances. Thus, the hypothesis that members with low level of general trust, when they were in groups, might exert much more aggression toward outsiders compared to those with high level of general trust was confirmed partially.

Keywords: aggressive behavior, competitive groups, outsiders, acquaintances, general trust.